

ディアコニア



神に従順であるということ

大泉ベテル教会協力牧師

森 史子

男児殺害の命令

エジプト王は二人のヘブライ人の助産婦に命じた。一人はシラフといい、もう一人はプアといった。「お前たちがヘブライ人の女の出産を助けるときには、子供の性別を確かめ、男の子ならば殺し、女の子ならば生かしておけ。」

助産婦はいずれも神を畏れていたためエジプト王が命じたとおりにはずせず、男の子も生かしておいた。エジプト王は彼女たちを呼びつけて問いただした。「どうしてこのようなことをしたのだ。お前たちは男の子を生かしているではないか。」助産婦はファラオに答えた。「ヘブライ人の女は丈夫で、助産婦が行く前に

産んでしまうのです。」神はこの助産婦たちに恵みを与えられた。

民は数を増し、甚だ強くなった。助産婦たちは神を畏れていたため、神は彼女たちにも子宝を恵まれた。

出エジプト記 1・15～21

皆様、初めまして。この度、誌上にて聖書の御言葉を分かち合わせて頂きます森史子(ちかこ)と申します。平成24年より、ベテスタ奉仕女母の家の理事の任に就いております。

それまでは、いずみ寮に勤務しておりました。また、大泉ベテル教会でも奉仕をさせて頂いております。どうぞよろしくお願い致します。

出エジプト記は、神に選ばれた一家族がエジプトに定住し、ヨセフの死後40年間奴隷となりつつも強大な民となる歴史を伝える物語です。神がその民を奴隷から救い出し新たな地へ向かわせる「出エジプト」物語です。

二人の助産婦

エジプト王は、強大になったヘブライ人(イスラエル人)に脅威を感じ、人口減少を計画しました。重労働を与え苦しめること、そして出産直後の男児を殺害することを謀ったのです。

ここに登場するシラフとプアは、イスラエル人の助産婦として同胞の男児殺害に利用される予定でした。二人はイスラエル人の助産婦たちを管轄する立場にありました。王は二人が、助産婦たちに対して医療事故にみせかけて男児を殺害するように指導を命じました。しかし、助産婦たちは王の命令に従いませんでした。神への畏れが、彼女達に「いのちへの責任」と、専門職として果たす勇気を与えたのです。

『人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。』—使徒言行録5・29—
これはペトロのことばですが、助産婦たちは厳罰も恐れず、神に従いました。そして、男女の差別も人種の差別もなく赤ん坊を取り上げました。

男児を殺して女兒は生かしておく理由

の根底には性差別があります。古代の法律では、子どもの人種は父親によって決まります。イスラエル人の女性がエジプト人の子を産むなら、その子はエジプト人になるので、女兒を生かしておいても問題はなかったのです。

男性主体で起こる性差別も、神の前には通用しない。神は、公正であり愛の方であることをイスラエルの民は、迫害の中でも信じていたのです。神はイスラエルの民を守り更に強大にされました。

神に知恵を与えられた助産婦は、王への言いわけを準備していたので咎められることもなく、神の祝福を大いに受けることができました。しかし、民への迫害はエスカレートし、収まることなく続きました。

この時からエジプトは、反ユダヤ主義政策を公に採用した最初の国となったのです。イスラエルは、それから幾度も危機に直面して来ましたが、それは今日も続いています。私たちは、イスラエルのためにも祈っていききたいものです。

支援を支える神

女性が職業を奪われていた時代に、彼女達のように助産師という専門職を持つ女性は希少な存在でした。

社会福祉法人ベテスタ奉仕女母の家の四施設（茂呂塾保育園、いずみ寮、かいた婦人の村、エマオ）にも、専門職として働く職員が多くいます。保育士、調理師、支援員、介護士、看護師、心理職、栄養士等々。私もいずみ寮の職員経験を通して、女性支援の重要性を教えられました。

婦人保護施設に辿り着いた女性たちの背負っている荷物（問題や弱さ等）は、簡単に解決できるものなど一つもないことを知らされると同時に、専門職が集まり協力する体制が、大きな力になることを学びました。

また、ベテスタの理念に流れる神への信頼が、困難を乗り越える力になっていくことも歴史を通して知ることが出来ます。そして支援のあり方によっては、人や施設に与えられた思いと国や権威によって課せられた義務との間で選択を迫

られることもあります。同様に、私たち一人一人の人生も順風満帆ではないことを知っています。

その時こそ、神の助けと恵みを体験する時であることを期待して神に従順でありたいものです。

（10頁よりつづく）

美しく整えられたゲストハウスに滞在し、奉仕女長オムリンを含む13人ほどの「共同体」の姉妹たちと、朝の礼拝、朝夕の食事と午後のお茶の時間をともに過ごし、片言の英語を通して、いろいろな話に花を咲かせたり、お茶会をしたりと、豊かな交わりの時を持ちました。昼食は母の家の7階の食堂で、70人位の奉仕女の方々と、短い礼拝から始まる、美味しい温かい食事をいただきました。

「共同体」の方々は、定年退職後、自分の出来ることに力を注いでおられます。ターニヤ姉はゲストハウスの管理運営と若者向けの聖書のコースを、アンネ姉はヴッパタルにも増えた貧しい移民のケアをされている、等です。（塩川 成子）

ディアコニアの原点①

わが兄弟なる此等の最小者の
一人になさざるは
即ち我になさざるなり

——マタイ 25:45

寄せては返す波打ちわの波のように、人類の歴史は絶え間なく前進したように見えて、その実ただ同じところを往來しているにすぎません。強きものが弱きものを踏みこえて進みますが、やがてその強者もいつかは弱者となり次の強者によつて踏みこえられておわる。弱肉強食の法則の支配するところ、循環は存在しえても進歩は起りえないからであります。

もしも人類の歴史にただの一步でも前進がありうるとしたならば、それは強者が弱者を踏みこえて進むことによつてではなく、強者が——強者なるがゆえに——弱者を助けおこし、その手をとつて、共に半歩でも前進するときに起るのであ

ります。弱者から切りはなされた強者のみの前進——それは何の解決にもなりません。

キリストが人類のなかにもたらした〈愛〉というのはそのようなものでありました。普通わたくしどもが愛というとき、それは己の利益のために、より高く、より好ましいものを求める慾——エロース——にすぎませんが、彼が発見し、教え、また行つたものは、その反対の、己の犠牲において、より低く、よりこのましくないものに与える愛——アガペー——だったのであります。



「飢えしものに食らわせ」

たとえどのように美しい言葉で人々に語ることができ、どのように多くの聴衆をあつめ、どのように見事な会堂をたて、

どのように深い書物をあらわすことができても、もしその人がこのキリストの与える愛を行うことがなかったならば、その人はまことのキリスト者ではありません。

キリストの与える愛をおこなうということ——それは何でもないことのように思われるかもしれませんが、いかにも十円玉ひとつを投与して胸に赤い羽根をかざることは容易なことではありません。けれども、聖書が命じているような〈二つの下着をもつ者は、またぬものに分け与える〉——ということは楽なことではありません。

とてもそのような重い課題には耐えられない——わたしにはそのような義務はない——といつて、一人さり二人さりするときに、増し加わる重荷のしたで最後まで耐えているのはキリストです。自己のこのみを考えてくらす全人類のエイズムの総量が、彼ひとり肩のしにかかっているのを見るとき、それでもまだ可能か不可能かを論議していることが私どもにゆるされるでありましょうか？

いかに人類の悲惨がおおきく見えても、人間の善意の総和のほうが更におおきいとお思いになりませんか？いかにサタンの跳梁がはげしくても、キリストの愛がこれを征服しうることをお信じになりませんか？

キリストの愛を知らない人たちは、これは政治がわるいのだ、これは組織がわるいのだ、これは経済の乏しさのためだ、これは文化の足らなさのためだ——と、あらぬかたを指さしてそしります。そして誰か自分以外のものの犠牲において、それが解決されねばならぬようなことを言います。

けれども、自分が決断をもって為さねばならぬ——そして為し得る——唯一のことは、自分の与えられたこの体と生命と、それに托せられた僅かばかりの物をはなれて他にないということを知らないのであります。

どうかして此の世の中を住みよいものにした、なにか自分にできることがあれば試してみたい、人類の幸福になるよう

なことを、キリストの御役にたつようなことを——と誰しも心の隅では考えています。しかし、その解答の全部が（これらのいと小さきもの一人）であることを御存知でしょうか？なにかもつと遠大な、これらの醜きものの彼方に、キリストへの奉仕があるように考えてはいらっしゃいませんか？実は、この私がそうだったのです。それだけ、ここに掲げられた御言葉に打ちひしがれる思いがいたします。

では、その最小者とは誰でしょうか？それを遙かなところに求める必要はありません。キリスト自身こたえたまいます——飢えている者、渴いている者、寄るべない者、裸かの者、病弱なもの、獄にある者。では、その人々に何をなせばよいのでしょうか？キリストはこたえます——飢える者には食をあたえ、渴ける者に飲ませ、寄るべなき者をもてなし、裸なる者に着せ、病弱なものを看護し、獄舎にある者のところに行くように——と。

おのれを義としようとして、それだけ

ですか——その他にあなたにお仕える途はありませんか——と問いかえす私どもに、キリストはこたえたまいます。これらの最小者の一人になさざりしは、即ち我になさざりしなり——と。

（深津 文雄）

1954年6月
「デアコニ」1号

*今号より、「デアコニアの原点」を連載します。ベテスタ奉仕女母の家発足の時点に戻って、法人の精神とはどういふものかを学んでいきたいと思ひます。

（成）

ただひとりあり
Nur einem kann uns leiten
Ruth Schumann Hermann Simen

ただひとりあり主任ス われらみち
びく主任ス なやみのうちをと
もにすすむ は主任ス

1954.5 深津文雄訳

施設だより

「いずみ寮の日々、あれこれ」

新年度が始

まり、早くも三

ヶ月がたちま

した。この時

期は、利用者

にとってもス

タッフにとつ

ても、新担当

との関係作りや、

個別支援プログラムの作成、自立支援会

議、居室替え・・・と、あわただしく、

少々緊張する時期でもあります。今、そ

れが無事に終わり、つかの間ですが、

ほっと一息をついているところです。



先日、四月二十日から始まった「ふか

つはうす」の十年目修繕工事が、約二ヶ

月かけて終わりました。「ふかつはうす」

とは、二〇〇三年に竣工した、創始者で

ある深津牧師の名前と、「ふっかつ（復

活）をかけて命名された建物です。その

前年、二〇〇二年四月にDV防止法が全

面施行され、いずみ寮もその一翼を担う

ことになりました。当時の作業場は、す

でに築四〇年を過ぎていて、作業場の建

て替えと相まつての建設でした。日本財

団からの助成、再組織されたいずみ寮後

援会をはじめ、多くの方々からのご支援

によって建てられました。

一階にある多目的ホールは、普段は、

利用者の日中活動を行う作業場（名称を

今年度から「COCOアートいずみ」と

呼んでいます）です。その作業場と喫茶

シオンは、冬はエアコンの暖房だけでは

足もとがスースーと寒いのが悩みの種で

した。しかし、今回の修繕工事で床暖房

になり、みんなで「冬になるのが楽しみ

ね」と話しています。

外側から見ても、すぐにわかるのが外壁

です。一昨年の大規模修繕で、管理棟・

居住棟の外壁が、金木犀の花の色に塗り

替えられました。そのやわらかな金木犀

の花の色に合わせて、コンクリートの打

ちっばなしたふかつはうすの壁が、

淡いベージュ色に塗り替えられました。

二階の母子さんたちが使う部屋の壁紙

も一新され、大きすぎた湯船も掃除のし

やすいユニットバスへ替えていただきました

ました。今回の修繕工事も、費用の八割を

日本財団が助成してくださったことで実

現したものです。「ふかつはうす」が出来

てから十二年たちますが、この建物に

よって、私たちがどれだけ多くの夢を实

現させてもらったか、本当に感謝したい

と思います。

そのひとつ、六月十三日に「ふかつは

うす」の多目的ホールで行われた「心の

鐘を響かせて」のコンサートのことをお

伝えします。

昨年に続

き今年の三

月にも、い

ずみ寮の合

唱サークル

「コールフ

ォンテ」とハン

ドベルサー



クルの「リズムクラブ」が音楽団「心の鐘を響かせて」を結成して、東日本大震災の被災地を訪問しました。現地と同じプログラムを、後援会総会の後に、お客様の前で再現したのです。

この被災地訪問は、東京都社会福祉協議会からの助成があつてのことです。婦人保護部会の企画として、都内にある五つの婦人保護施設へもお声をかけ、各々職員が参加しました。岩手県大船渡市、宮城県登米市にある仮設住宅を訪問できたのは、コルフォンテの講師鹿内先生がつかないでくださったご縁です。総勢二十八名のうち利用者は退寮者含めて十名が参加しました。利用者たちが被災地を訪問できたことについては、思わぬ副産物がありました。

二年連続で参加したAさんは、幼少期より虐待や性虐待を受けてきました。結婚してからはDVの被害を受け、自らは子への虐待という負の連鎖に、心を閉ざし、感情がない人間のように生きてきたといいます。しかし、現地で被災者の方々と触れ合う中で、揺さぶられた自分

の感情に驚き、自分が何かの役に立てていると知った感動を、語るようになりました。今まで拒否的だったトラウマの治療にも前向きに取り組もうとしています。当日は、登米市の仮設住宅の自治会長

さんである宮川さんご夫妻をお招きして、震災と津波の恐怖、過酷だった避難生活のお話を伺いました。四年という月日が経つても、ご自分の語る言葉に甦る、記憶が重なり、途中何度も、嗚咽で言葉が途切れました。私たちが歌や演奏を通して、被災地の方々とともに心の鐘を響かせ、つながった絆を、決して途切れないように……と祈りました。

五月には、二月

九日に亡

くなつた

いずみ寮

の警備犬

ハッピー

の納骨式

がありま



した。ハッピーは十六年十一月という長い年月を生き、天寿を全うして眠るようになり、亡くなりました。

最後は動けなくなり、オムツを当てて、スポイトで水を飲ませ、二時間ごとの体位交換をして、いずみ寮のわんだふる（有志の犬のお世話係）を中心に、手厚い看護と見守りの中での大往生でした。火葬場にも退寮者を含め、九人の利用者が同行し、お骨はお墓の出来るまでの約二ヶ月間、管理棟の玄関に安置してました。

毎日のように、お水を替えたり、お花を生け替えてくれたり、ハッピーに話しかけにくる利用者がありました。動物といえども、いえ動物だからこそ、人とのコミュニケーションがうまく取れない利用者にとっては、心のよりどころとなっていたのだと思います。ハッピーと心を通わせ、彼の死を通して自分の人生を振り返り、気持ちを整理していった利用者も多かったです。

ハッピー、天国からいずみ寮のみんなを見守っていて下さいね。（伊比 鮎子）

法人の歴史

かにた婦人の村編 ①

「かにた」とは、

そこを流れるちいさな川呼び名でした。

赤手蟹が、チヨロチヨロはつている、

だあれも使わない小さな地名を、

こっそり頂戴して、

「コロニー」と呼ばれてきた、

大きな夢の名にしたのです。

そこへ全国から送られてきた婦人たちは、

いまの強い者がちの世の中では生きてゆけな

く弱者じゃ。

それを最低から受け入れて、

広い自然の中に甦らせるつもりです。

今年、かにた婦人の村は創立五〇周年を迎えた。なぜここにかにた婦人の村があり、なぜ創設者・深津文雄が神学の世界でなく、実践の世界で生き、終焉の時までこの村で村人たちと共に生きること

を選んだのか、深津文雄の哲学と共に、かにたの歴史を追っていきたい。

コロニーの夢実現への火種を蒔いた矯

風会の久布白落実氏との最初の出会いは

1956年8月、「売春防止法に捧げら

れた半世紀のいのち」という新聞記事を

読み、面会を申し込んだことから始まる。

最晩年の、林千代氏との対談で「久布

白がなければ僕がないんだよ」と言われ

めた存在との出会いであった。その最初

の出会いで「売春婦の更生こそ我々がや

らねばならないと確信した」という。

彼は長い牧会の労苦の中で、ことに戦

後の日本の現実をたいし、これではいけ

ないと抵抗してきたことは、この一点一

売春―だったのではないか。日本に生ま

れた奉仕女が、日本独自の大きな問題―

売春―を奉仕女独自の方法で解決するこ

うことでなくてはならないと考えたが、

牧師と奉仕女にそれができるかという声

は極めて強かった。深津は福音書をひら

いて、イエスと税吏、イエスと罪人、イ

エスと遊女、その関わり合いを熱心に読

んだという。

そして決定的に彼を捉えたのが、ルカ

による福音書7章の〈罪の女〉、マゲダラ

のマリヤの更正したがたである。「聖

書はすべて失われてもこの一片が残って

いれば十分」と思わしめたほどに。――

かにたの礼拝堂には、「マリアマゲダ

レーナ」の文字のステンドグラスが掲げ

られ、納骨堂には掛井五郎作「キリスト

と姦淫の女」の彫刻が置かれている。

「ひとり社会に生きるには弱すぎる人

を、清くたくましく、生きさせる場所が

なくてはならない。それはせまい、しば

らくの施設ではなく、広い、働きのある

永住の地でなくてはならぬ」という理想

のコロニー運動への兆しであった。

そして、1957年、厚生大臣・堀木

謙三に会い、100万坪のコロニーを提

案。その時のことはディアコニ23号の

「新しい社会事業の方向」に詳しく書かれ

ており、コロニーの夢を語っている。

「あまりにも人々は、健康者本位にも

のを考えすぎるので、落伍者たちの心情

を考え、彼等の歩調に合わせて、彼等の

魂の平安をとおとびつつ、神がこれらの人を世に生かしておきたもうかぎり、かならず何か生きる意味があり、なすべき業があり、その歓喜があるはずだと、それを追及して、共に生きるコロニーを作らねば、問題は解決しないであろう。もし私に、それに用うべき広大な地積と若干の建物が与えられるなら、私は奉仕者たちとそこに入り、世の煩いになるこれらの落伍者とともに楽土を築くことに、生涯を残らずささげても惜しいとはおもうわない。かかる『失せたるものを尋ねて救う』ことこそキリストがこの世にきた真の意味だから・・」

ゴミのように扱われている「社会の落伍者」この都市の中を一所から他所へと掃きよせられている者たち、これを私にまかせていただけないだろうか？ 私は、彼等に雨のもらぬ屋根をあたえ、飢えをしのごにたる食物をあたえ、神が彼等にゆるしたもうその心と体の健康を回復せしめ、生きていくことの悦びと、やがて働くことの悦びを教え、ある者には針仕事、ある者にはパンこねを、ある者に

は、畑仕事を、ある者には養鶏や養豚を、それも出来ない者には粘土工作やブロック作りを、何なりとその人の出来る好きなことをさせて、次第に生産と直結させ、製菓工場もある、洗濯工場もある、洋裁工場もある、果樹園も農場もある、病院もある、学校もある、廃品回収もやるといったコロニーを、私は作りたい。」深津の夢は、ドイツに住んだ経験のある堀木大臣の心からの賛同を得て、具体的なプランの提出を促された。

1958年6月6日、開設したばかりのいずみ寮を訪れた矯風会の久布白氏は寮生と三時のお茶をした。売春防止法の生みの親、いずみ寮のできたことを一番よろこんでくださる方、と紹介をすると、MYが「わたしたちは、身も心もよわいから、助けあつて一生きれいにくらせる村をつくりたい。先生はお顔がひろいからぜひ国会のほうにも働きかけて、わたしたちのコロニーを、実現するよう、お助けくださいまし」と訴えた。久布白氏は「なにことも、ひとだのみで、できるものではない。そう思つたらじぶんで、はじ

めなさい。あしもの一歩から。わたしが、きょう種をまくから、これを育てなさい。いくらあるか、これみんな」といしながら食卓に財布を逆さまにし、落ちたお金52円をMYが受け取り、それに同行の3氏もいくばくかのお金を加えたという。このことに深津は「脳天をガーンとやられたような気がした」という。どえらい規模のものを考えていた彼は、それがポケットの中のバラ銭から育てられるとは思わなかったのである。あしもとから確実に、多くの人の祈りを集めて、ということ、を、ずばり指摘され、しかも寮生にこのようなことを言わせたことに強く反省させられたと記している。

この52円が、彼の「コロニー宣言」の核となり、原動力となり、コロニー建設への大きなうねりを起こす。その年12月1日、コロニー後援会発足。足掛け8年に及ぶかにた婦人の村誕生に至るまでの苦難の道の始まりである。（天良さゝ子）

*参考文献「ディアコニ」「いと小さく貧しき者に」「深津文雄先生に聴く（林千代）」

エリーザベット姉の お誕生日を祝いに

エリーザベット・フョーリンガー姉は
ベテスタ奉仕女母の家創設時に、加須の
飯の母の家で、ハンナ姉と共に、最初の
献身者4姉妹の奉仕女教育・訓練に尽く
された方です。1957年、深津文雄が
堀木厚生大臣にコロニーの必要性を話し



「ふたり」かにたの写真を見ながら



妹さん御夫妻と共にお祝い

に行く時にも同行されました。
かにた婦人の村の初代医務と
して、館山の街をフォルクス
ワーゲン・ブスで走りまわった
日々も、懐かしい思い出です。
数年前、パーキンソン病に
より転倒して右手が動かせな
くなり、何もかも、他人の手を
借りなければならぬ生活を送
つておられます。

そんなE姉をお見舞いして



夕食後の「お茶会」ターニャ姉がお抹茶をたてる



誕生日の朝 コラールを歌ってお祝いする

励ましたい、89歳のお誕生日をお祝いし
たいと、今回の訪独となりました。道姉
は、ベテスタでE姉と共に生活され、郊
外にお茶を飲みに出かけたり、ベテスタ
の墓地を訪ねたりして過ごされ、天良と
塩川は、レンタカーで田舎道や山道を走
りまわり、音楽や美術・工芸を楽しむ休
暇を過ごしました。
ドイツのベテスタも高齢化のため、母
の家の上部2フロアーだけを母の家とし
て使用し、下の5フロアーは老人ホーム
として別組織が管理。E姉は2階の個室
で、ケアを受けておられます。(3頁へ)

この度、ミチ姉がベット姉をドイツに訪問されて、東京の姉妹に報告にいらした時、帰りに私の所にも寄って下さり、何枚も写真を見せて下さいました。その中に、ドイツのシユヴェスターで、私の祈りの友になって下さっている方の姿もあり、とても懐かしく思いました。山下は元気かと聞いて下さったとのことほんとうに嬉しく思いました。

遠くドイツに思いを馳せて、あの方にもこの方にもと祝福をお祈りしました。 山下 操

最近、練馬区で進めている地域の絆・広がりづくりの集まりに参加しました。

「ぴんぴんころりのライフプラン」について宮原恵子所長のお話は、高齢者にわかりやすく良かったです。

加齢によるさまざまなマイナスイメージが先行しやすい社会の中で、高齢者の豊かな知識が大切にされて、社会に共有されることを願っています。「いきいき健康づくりのために」 細井 陽子

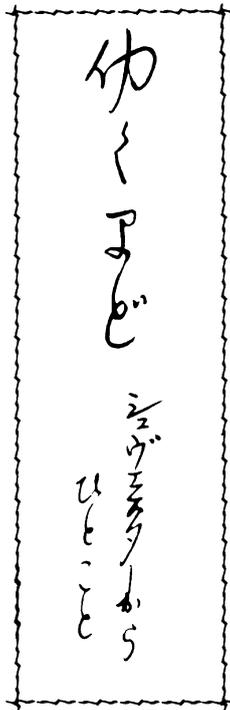
鳴き交わし確かめ合ふか夏鴉

額紫陽花召されし人の面影や

未だなほ傷癒されず終戦日

備えつつ秋思の祈り密そやかに

植木 道子



もう一度と、二年前からの念願叶って、

5月13日、エリザベット姉89歳のお誕生日を、ドイツ・ヴッパタルの母の家でお祝いすることができました。車椅子で、

しかも右手が不自由になっておいでのE姉を、同行の塩川、天良両姉の手作りの大巻き寿司、味噌汁、肉じゃが等で祝い、十日間を共にしてきました。 天羽 道子

ここ（相浜ガーデン）に来たら、すぐ本を読む時間があります。それが楽しみで、感謝です。新聞の広告を見て頼んだら、すぐ取ってくれるの。渡辺和子さんの「面倒だから、しよう」を買って、読んでいます。小さい本で3頁ずつだから、すぐ読めるの。 桜庭 歌子

戦後70年を迎え、国会の論議を聞いていると、国を守ることはどんなことなのか考えさせられる。戦火をくぐり抜けた私達の年齢で、再びあの経験はしたくないと。主に地に平和を！ 小川 都代

度々の祈りの友の計報に、時の流れを思われます。ご本人が亡くなられた後、すぐにご主人が後を継いで下さり、その方も亡くなり、二代に亘って祈り支えて下さった方も居られます。何と有難いことでしょう。感謝あるのみ。私達も最後まで主に仕えて参ります。 眞山知恵子

おしらせ

★ 訃報

長い間、植木道子の祈りの友としてお支えくださいました松下紀子姉が、15年1月23日に召天されました。生前のお交わりを心から感謝し、ご家族の方々の上に天父の深い慰めと平安をお祈りいたします。

★ 献金ありがとうございました。

3～6月分

新居浜西部教会、亀戸教会、横浜菊名教会、余郷志津子、細川八重子、千歳船橋教会、西村多見子、中村由紀子・八重、藤沢ベテル伝道所、松原教会婦人部お仕事会、ベテスダ姉妹会、佐藤元紀、広瀬公男、酒井忍、柴山操、田浦教会エレミヤ会、小林則男(亡小林イサ遺志)、石垣鈴子、柴田とよ子、本間光雄、岡崎節子、大和キリスト教会支援委員会、森戸隆夫、浅野康子、神代英理(亡松下紀子遺志)、鎌倉雪ノ下教会

(敬称略)

★ ベテスダの日のご案内

今年も、6月に改修工事が完了した、いずみ寮・ふかつはうすで開催します。皆様どうぞご予約下さい。

日時 9月19日(土) 11時より

会場 いずみ寮

電話 03-3924-2002

西武池袋線・大泉学園北口下車

西武バス「新座栄行」乗車

「天沼マーケット」下車徒歩2分

★ 評議員会・理事会の審議事項

第2回評議員会・第197回理事会

(2月28日)

・2014年度補正予算

第3回評議員会・第198回理事会

(3月20日)

・2015年度事業計画・予算

第4回評議員会・第199回理事会

(5月16日)

・2014年度事業報告・決算・監査

報告

・特別縁故者に対する相続財産分与

(亡茂木節子姉)について

・基本金及び国庫補助金等特別積立金

の、かいた婦人の村からかいた作業所エマオへの移管について

—— いずれの議題も

承認・可決されました。

★ 編集後記

かいた婦人の村50周年記念事業を計画しております。施設の建物は老朽化し、あわせて土砂災害危険区域等にも指定されましたので、建替えを検討しております。つきましては、皆様の日々のお祈りの中でお覚え下さり、益々のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(佐藤 元紀)

二〇一五年七月一五日発行

発行人 大沼 昭彦

編集責任者 佐藤 元紀

印刷所 (株)印刷センター

発行所 〒一七八-〇〇六一

東京都練馬区大泉学園町

七一七-一三〇

社会福祉法人ベテスダ奉仕女母の家